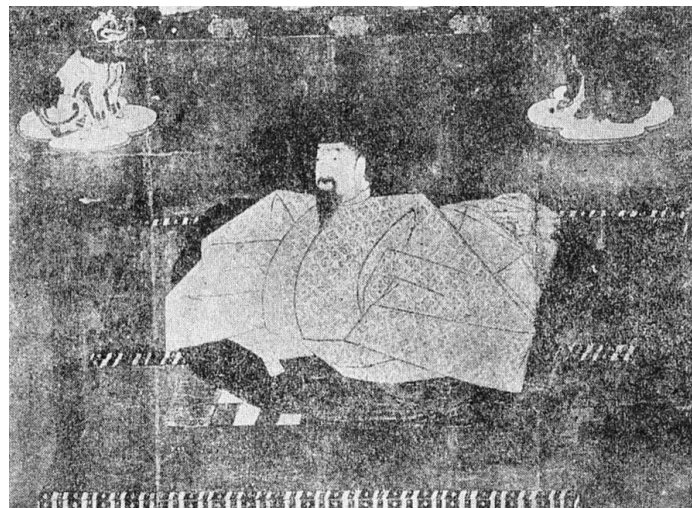


# 第9話 正中の変と元弘の変

ごだいご とうめつ  
ご英明な後醍醐天皇が政権を取り戻そうとおぼしめして、北條氏の倒滅を  
はか 謀られたが、二度ともに失敗に終わる。 おき せんこう  
隠岐にご遷幸。

## ごだいご ごりそう 後醍醐天皇の御理想

ごだいご か こういけいしょう  
第96代後醍醐天皇は、予ねて幕府が皇位継承  
もんだい くちばし い たい  
の問題にまで 嘴 を容れて、朝廷に対してさえもし  
ばしばわが侘な事のあるのを 憤りになっていた  
まま いきどお  
が、今や執権高時が世の人望を失い、幕府の実力  
たかとき じんぼう うしな じつりよく  
も既に衰えたことをお聞きになると、この機会に  
すで おとろ きかい  
こそ北條氏を討ってこれを滅ぼし、政権を朝廷に  
ほろ せいけん ちやうてい  
取り戻して、わが国体の本義に帰り、高時の悪政に  
と もど こくたい ほんぎ たかとき あくせい  
苦しめられている万民を救おうと思われた。



ごだいご  
後醍醐天皇

ごだいご おんな たかはる ごうだ えいめい  
後醍醐天皇は御名を尊治と申し、後宇多天皇の第2の皇子です。 ご幼少の時から英明であったので、  
かめやま しじゅう そぼ とくべつ あい こうたいし た おんとし  
御祖父の亀山上皇は始終お側に置いて、特別に愛されたといわれる。 皇太子に立たれたのは御年21才  
みくらい つ こうあん えき  
の時で、御位に即かれたのは31才、弘安の役から37年後です。

天皇はもともと英明であった上に、皇太子時代の10年間に殊に多くの学者に就いて広く学問を修め  
こと つ おき  
られ、とりわけ古今の政治に就いては特に深いご研究をなされて、夙に天皇親政の古えに復すことを理  
ここん けんきゆう つと てんのうしんせい いにし ふく り  
想とされた。

## ごうだ かんせい 後宇多法皇の還政

それで、御即位の当時は、これまでの例によって しばら ごうだ いんせい み  
暫くは父後宇多法皇が院政を視られたが、法皇も  
へいがい さと ごだいご とし すで ちやう  
既に院政に弊害のあることをお悟りになっていたし、第一、後醍醐天皇のお年も既に長ぜられており、  
こと はい まつりごと かえ しらかわ  
殊に英明でしたので、ご即位の3年後に、法皇は院政を廃して天皇に政を還された。 実に白河法皇  
以来、230余年も続いた院政が全く廃されたのです。 非常な革新であったといわなければなりません。

## しんせい 後醍醐天皇の親政

それで、後醍醐天皇は、嘗て後三条天皇の時に置かれた記録所を再興されて、そこにお出られて朝  
かつ ごさんじやう きろくしょ さいこう で  
廷の政を視られた。 政治を一新しようとする御意気が壮んで、そのご決断は誠に流れるが如くで  
まつりごと み いっしん いき さか いっけん まこと なが ごと  
あったので、天下の民は挙ってこれを仰いだという。 しかし、この時代は、前にも度々言ったように、  
てんか たみ こぞ あお たびたび  
鎌倉の幕府が政治上の実権を握って、全国を支配していたので、朝廷の政治の及ぶ所は僅かでした。

天皇の親政がいかに一新され、善政を施されても、全国の人々は少しもその恵みを受けることがで  
しんせい ぜんせい ほどこ めぐ  
きないのです。 ご英明な天皇がこれをご不満とされたのは当然の事で、この意味からも早く幕府を倒し  
ふまん とうぜん いみ はや たお

## 第9話 正中の変と元弘の変

めいじつとも しんせい  
て、名実共に天皇の親政にしようとなされたのです。

### せいちゅう へん 正中の変

さて天皇は、親ら政治をなさるようになってから3年の後、即ち正中元年に、いよいよ北條氏を討とうとされて、近臣日野資朝、日野俊基らと専ら謀をめぐらされた。それには、先づ第1に、密かに兵を諸国から召集めなければならぬので、日野資朝は山伏の姿になって密かに関東に出かけ、日野俊基は修験者に姿をかえて、紀伊の温泉に赴くと称して都を出で、大和、河内の勤皇の志士を招いた。この時、美濃（岐阜県）の豪族土岐頼兼、多治見国長らは真っ先に召しに応じて京都に上り、そのご相談にも與かって、計画はだんだんと進んだ。

しかし、ふとした事から謀が洩れて、六波羅探題の知る所となったので、土岐頼兼、多治見国長は不意に宿所を六波羅勢に襲われて、遂に自殺した。やがて、日野資朝、俊基も捕らえられて鎌倉に送られた。

天皇はともかくも一時は執権高時の怒りを鎮めなければなるまいと思われ、特に中納言萬里小路宣房をお使いとして鎌倉に下して、御誓いの書面を高時に賜り、此の度の事は御自分の全く関係のない事で、御自分には北條氏を討つなどという心は決してない、という御趣意を伝えさせられた。

そのために漸く事が穏便に済み、日野俊基も赦されて、翌年京都に帰ったが、日野資朝だけは今度の事、首謀者と見做されて佐渡に流された。世にこれを正中の変といいます。正中元年2年に亘つての事だったからです。

斯うして天皇の第1回の御計画は敗れたけれども、天皇のお志は決して挫けはしなかった。巧みに幕府の疑いの目を避けながら、極めて秘密に、次のご計画をすすめているうちに、また1つ、天皇の憤りを増す事が起こった。それは立太子の問題に就いてです。

### りったいし もんだい 立太子の問題

後醍醐天皇はご即位の初めに、御父後宇多法皇のおぼしめしで、御兄後二条天皇の皇子、即ち天皇の甥に当る邦良親王を皇太子にお立てになった。しかし親王は正中の変の起こった翌々年の3月に、ご病気のために俄かに薨じたので、天皇は、今度は御自分の皇子の中から皇太子を立てようと考えて、その趣を幕府に相談された。皇位は、持明院統と大覚寺統との両皇統から代わるがわる出でて継ぐ定めでしたが、既に決められていた大覚寺統の邦良親王が、まだ皇太子のままで薨じられたのですから、今度の皇太子も尚大覚寺統から出すべきであるというのが天皇の主張でした。

ところが、執権高時は天皇のおぼしめしに従わず、両皇統が代わるがわるお立ちになる事を主張して、ついに持明院統の第93代後伏見天皇の皇子量仁親王を立てて皇太子となした。

### げんこう へん 元弘の変

天皇はいよいよ北條氏のわが俣を憤りになって、一層討伐の企てを強くされたのですが、諸国の武士を召集めたのでは、またも正中の変の時のように謀の洩れ易い虞れがあるとの懸念から、今度

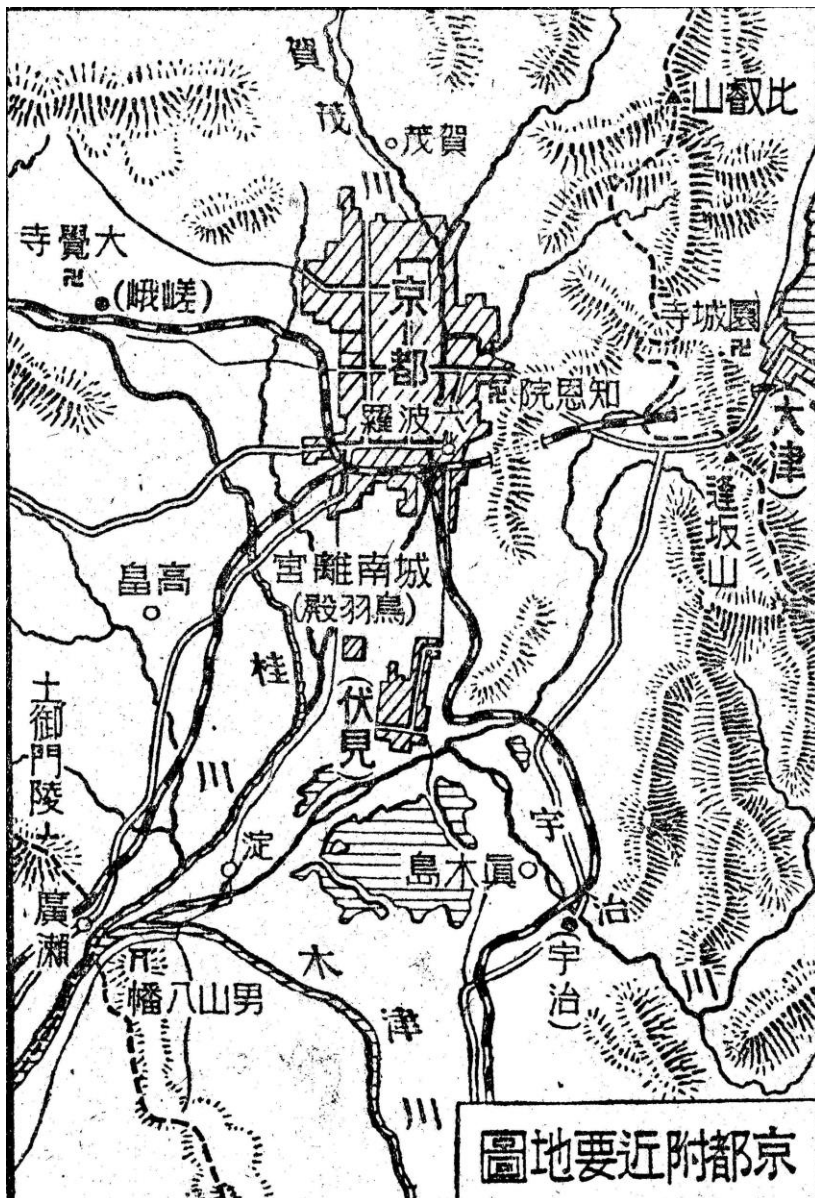
第9話 正中の変と元弘の変

は僧兵を身方にしようと思われ、先づ護良親王を天台座主として比叡山延暦寺に入らせた(訳注:現在は、護良を護良とも訓みます:歴史学会)。

叡山の僧兵らを懐けようとしたのはいうまでもありません。親王は叡山の塔に住んでこの寺の取り締まりをなされたので、世に大塔宮と申し上げます。

また、天皇は皇后のご安産を祈らせるという事にかこつけて、京都の名高い坊さんの円観、文観らを宮中に召して北條氏を滅ぼす祈禱をさせた。

後にはまた、御親ら奈良の東大寺や興福寺においでになり、又、比叡山に登られたりして、これらの寺々に土地などの寄付をなされた。



今度の企てもまた相談相手は日野俊基らで、ずいぶん秘密にしていたのですが、ついに洩れて、関東に密告した者があった。執権高時は人を京都に遣わして、俊基を始め、円観、文観らを捕らえて鎌倉に送らせた。時に元弘元年6月、正中の変から7年の後であります。

大塔宮

後醍醐天皇は、こうして既に謀が関東に知れ渡った上は、もはや致し方ないので、急に僧兵を始め諸国の武士を召集することに手筈を定められ、先づ六波羅を攻めさせて、その騒ぎに紛れて叡山に行幸し給い、大塔宮とも力を協せて、この山を根拠にしようとした。

ところが、この事を六波羅では早く知って、官軍の集まらぬ前に皇居を囲もうとした。元弘元8月24日、天皇はその日も記録所に出て、訴訟を裁かれていたが、今夜、六波羅の軍兵が押し寄せてくると密かに告げ奉じたものがあつたので、天皇は急に初めのご計画を変え、叡山への行幸を止めて、その夜、俄かに三種の神器を奉じて宮中をお出になり、奈良を指して落ちられた。

一方、行幸をお待ち申している大塔宮を始め、叡山の僧徒らの失望することをご懸念し、今一つは暫く天皇の所在を晦ましてその間に諸国の勤皇の志士を招集しようとお考えから、大納言藤原師賢に天皇同様の装束を着けさせて、これを御輿に乗せて比叡山に遣わされました。

## 第9話 正中の変と元弘の変

### 叡山の防戦

その夜、六波羅探題の北條仲時は、**天皇**が密かに宮中を出られた事と知って大いに驚き、直ちに一隊の兵を遣わして宮中を捜索させたが、その結果、叡山に行幸とのことと信じ、その跡を慕って烈しくこれを攻めさせた。天皇の御輿を迎えて勢いのついた僧兵らは、**大塔宮**の指図で勇ましく防ぎ戦っていたが、天皇の御座を、一旦お入りになった西塔から本院にお遷ししようとした時に、折から吹きおろした山風に、ふと御輿の簾がまくれて、それが真の天皇ではなくて藤原師賢であることが分かったと、僧兵らはがっかりして、八方に逃げ散り、延暦寺の防御は忽ち破られてしまった。**大塔宮**は奈良に遁れ、師賢らは笠置を指して落ちました。

### 笠置山に行幸

これより先、天皇は宮中をお出になって後、途中から怪しげな御輿に召し替えられ、中納言萬里小路藤房、中納言北畠具行らのお供で、やがて奈良にお着きになった。

しかし、そこには鎌倉方と思われる有力な坊さんもいたりして、周囲の形勢が思わしくなかったので、転じて木津川の上流に聳える笠置山においでになり、山上の寺を行在所として近国の兵をお募りになった。時に元弘元年8月27日、京都をお出になってから3日目の事でありました。

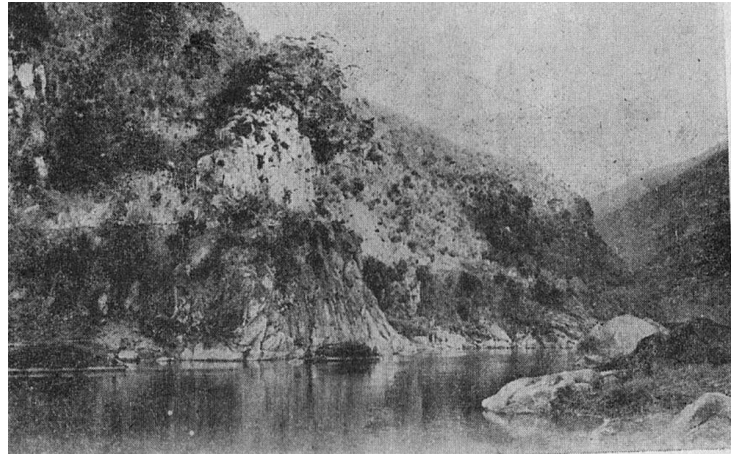
この知らせが六波羅から早馬で鎌倉に達したのはその3日後でした。幕府では直ちに会議を開いた結果、承久の例に倣って、すぐさま大兵を西上させることとなり、**大佛貞直**、**金沢貞冬**、**足利尊氏**らの諸将に200,000余万の大軍を率いて、9月5日から3日にわたって、陸続として鎌倉を進発させた。

### 楠木正成

一方、笠置の行在所では、その山は登り900m、高さ200mという小さな山であるにも拘らず、容易に登ることも出来ないほどに険阻な岩山なので、その要害を利用して、木戸、逆茂木、石弓などの武備を施して、この寺の坊さんを始め近国から集まってきた武士らに木戸々々を守らせた。

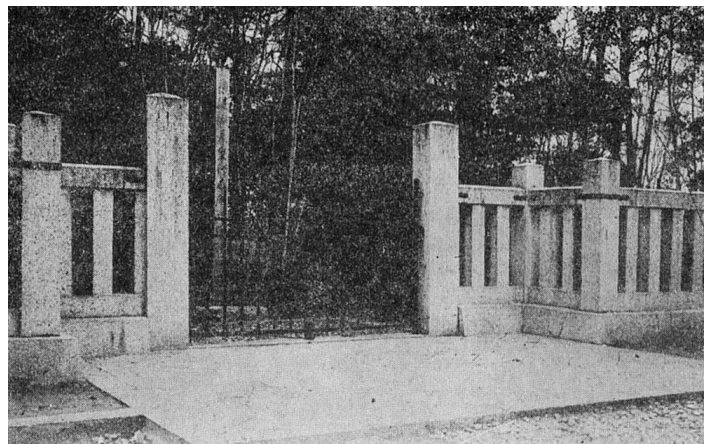
この時、**天皇**のお召しに応じて、河内の豪族

**楠木正成**も行在所に参ったが、これに就いては天皇の不思議な御夢の話が世に伝えられています。



京都南部 奈良県境近

笠置山



京都南部 奈良県境近

笠置山の行宮址

## 第9話 正中の変と元弘の変

### 不思議な御夢

その夢はこうです。――天皇が笠置の山で兵をお召しになると、近国の兵はここかしこから集まって来たが、まだこれという名のある武士は一人も来なかったのが、天皇は不安に思われ、その御心配疲れにある日とろとろとお眠りになると、夢を見られた。所は、紫宸殿の庭前と思われる所に、大きな常盤樹が立っている。緑の蔭が茂って、南へ指した枝が殊に栄え蔓っている。その下に、太政大臣、左右大臣を始め、文武百官が位によって居並んでいる。

南に向いた上座に、座の畳を高く敷いて、そこにはまだ坐っている人がいない。天皇は夢の中で、誰の為に設けた席であろうかと思われながら、立っておられると、どこからともなく、髪を角髪に結った童子が2人あらわれて、天皇の前に跪き、涙を袖にかけて、「広い天下に、しばらくも御身を隠される所はありませんが、ただあの樹の蔭に南に向いたお席があります、あれこそ御為に設けた玉座でございますから、しばらくあれにお座りになりませ」と申し上げて、童子は遥か天にのぼって行くと、とご覧になると、夢はやがて覚めた。

天皇は、これは天が御自分にお告げになる夢に違いないと思われて、文字に就いて考えて見られると、木に南と書いたのは、楠という字です。その蔭に南に向って坐るとするのは、天子が国を治める事なのですから、さては楠という者の力で、御自分が再び天下を知める事を天が告げたのに違いない。天皇はこの様に夢を判断されて、心にたのもしく思われ、夜が明けるのを待って寺の坊さんに、若しこの近辺に楠という武士はないかとお尋ねになった。この近辺にはいないが、河内の金剛山の西に楠木正成という者がいるという事をお答えしたので、天皇は非常にお喜びになり、やがて萬里小路藤房をお使いとして正成をお召しになったというのであります。

しかし、これは正中の変の前に日野俊基が天皇の仰せを受けて、修験者となって大和。河内の方面の志士を募った時に、正成が誠忠無比の士であることを知って、密かに天皇に奏しておいたのをこの時に思い出されたのかもしれませんが。

### 楠木正成の奏上

楠木正成はお召しを受けると、直ちにありがたくこれをお受けして、先づ忍んで笠置の行在所に参り、「いかに賊軍が強くとも、謀を以ってすれば撃破することはむづかしくはありません。けれども、勝敗は軍の習いですから、たまたま破れることがありましても、決して御心配下さいますな。正成が一人まだ生きていますとお聞きでしたら、御運は必ず開けるものとおぼしめしてくださいませ」とたのもしげに申し上げて河内に帰り、城を赤坂に築いて、天皇をお迎えしようと思った。

この頃、備前(岡山県)の児島高德、備後(広島県東部)の桜山慈俊の2人も、前後して義兵を挙げて、遥かに天皇に応じ奉った。

一方、延暦寺を攻めて勝ち誇った六波羅は、天皇が笠置山においでになった事と知ると、さらばそこをも落とせると、その勢3,000騎で笠置山に向かい、9月6日には既にその先陣は木津川に迫って、両軍

## 第9話 正中の変と元弘の変

しょうとつ  
の衝突がありました。

### かさぎ らくじょう 笠置の落城

この時、笠置山には兵は多くもいなかったが、立て籠もった者はみな忠勇な勤皇の士で、殊に要害に據って守っていたのですから、賊軍が攻め寄せてもびくともしなかった。わけても三河国の住人足助次郎重範がこの山の一つの木戸を堅めてよく防戦に力めたので、賊軍が攻めかけてから20日近くになっても落ちず、今は寄手も攻めあぐんでいるところに、先に鎌倉を發した200,000万の大軍が、9月25日に笠置に着き、27日に3方から総攻撃を始めたのです。

それでもなお山上は安全だったのですが、たまたまこの山の様子を知った者が間道を賊兵に教えたので、その夜、賊兵は密かに山上に達して寺に火を放った。火は忽ち拡がって、煙は全山を覆い、ついに行在所にも及んだので、さすがの官軍も今は詮方なく、散りじりになって逃げた。時に元弘元年9月28日、ちょうど、ここを行在所とされた1ヶ月の後であります。

### ごほこう おぼつかない御歩行

さて後醍醐天皇は神器を奉じて、藤房、具行以下の僅かの人々を従えて、山中を遁れ出でられたが、もとより御乗り物としては無いのですから、お体を賤しい者の姿に着替えられ、徒歩のままで人目を忍ばれた。始めの100~200mの程はお供の人々も揃っていましたが、折からの闇夜で、道は暗く、雨風さえも烈しいのに、敵の鬨の聲はここかしこに聞こえる中を落ち延びるのですから、次第に別ればなれになって、後には藤房、季房の兄弟の外は、天皇の御手を引くものもなくなった。

いかにしても夜の内に赤坂の城へと御心ばかりは逸られたが、仮にもお慣れにならない歩行のことで、1歩行っては休み、2歩行ってはお立ち止まられるのですから、一向に道は捗取りません。昼は路の傍らの林や岩蔭などに身を隠し、夜は人の通らぬ野原の露を分けてさまよわれ、30日に漸く山城国の有王山の麓まで落ち延びられた。すでに3日の間、藤房、季房も食事をしていなかったの、足はくたびれ身は疲れ、今はいかなる目に遭おうとも逃げるなど出来そうにもなくなりました。よんどころなく、せめては暫く疲れを休めようと、松の下蔭に立ち寄ると、折りしも梢を払う朝風の為に露がはらはらと落ちて御袖にかかった、天皇はこれをご覧られて、

さして行く笠置の山を出でしより あめが下には隠家もなし

とお詠みになった。藤房は涙を抑えて、

いかにせん頼むかげとて立寄れば なほ袖ぬらす松の下露

とお答え申した。

ああ、一天万乗の君が、この日本の支配者である天皇が、賊臣に行在所を焼き払われ、おぼつかないご歩行に幾夜かさまよわれ、ついに身の置き処もないとお歎きになったのです。何という事でしょう。

しかし、恐れ多い事はこれだけに止まらなかった。間もなく賊兵はついに天皇をお捜しして、怪し

## 第9話 正中の変と元弘の変

はりこし の おさざぎさだなお ぐんぜい けいご うじ びやうどういん い とうりゆう  
げな張興にお乗せ、大佛貞直らの軍勢の警護で宇治の平等院にお入れしたが、1~2日の逗留の後に、  
さら ろくはら つ らんぼつ まい かたびら かさ  
更に六波羅にお連れした。この時、天皇は御乱髪で、一枚の帷子をお重ねになっておられただけという  
あや すがた おどろ いふく  
怪しいお姿でした。さすがに六波羅の者共も驚いて、御衣服をまいらせたということです。

### 光厳院の擁立

これより先き、天皇が都を出られたたのを幸いに、元弘元年9月25日、笠置の城がまだ陥らない前  
に、執権高時は皇太子量仁親王を立てて天皇とした。これを光厳院と申す。けれども、もとより正式  
の御譲位でもなく、勿論三種の神器もないのですから、正当な天皇とは申し上げることが出来ない。そ  
れで、後醍醐天皇が六波羅にお遷りになると共に、幕府は神器を光厳院にお渡し下さるようと強請し  
奉った。天皇は、北條氏のわが儘をお怒りになって、お許しにならなかったが、度々の強請を終には  
うるさく思われたので、10月5日に漸くご承諾の旨を仰せられて、その翌6日にお渡しになっ  
た。けれども、実はこれは偽器でして、真の神器は御身に添えてお離しにならなかったのです。それ  
で、国史では、光厳院を歴代天皇の中にお加えしません。皇位の御するしである真の神器をお受けにな  
らなかったからです。

### 赤坂城の楠木正成

さて楠木正成は、先に笠置の行在所を辞して河内に帰り、城を赤坂に築いて、天皇をお迎えしようと  
していた。ところが、間もなく笠置は陥り、天皇は賊軍の手に落ちて六波羅にお移りになってしまった  
ので、幕府の大軍は、悉く正成の赤坂城に攻め寄せた。その総勢は300,000騎、これを4手に分けて、  
第1軍は大佛貞直、第2軍は金沢貞冬、第3軍は江間越前守、第4軍は足利尊氏の諸将が率いて、  
さながら雲霞の如くに迫って行った。

城は一辺が220mにも足らない小城で、東の1方こそやや小高い丘に続いているが、3方は平地で、  
濠を1つめぐらしているに過ぎない。櫓を2,30ほど掻きならべて、僅かに500人の城兵が籠って  
いる。賊軍はこれを見て、「なんという哀れな敵の有様であろう！ こんな城は、われらが片手に載せ  
て投げても投げつけられる。せめて楠木めが1日でも支えてくれると、思う存分の手柄をして恩賞に  
あづ預かるのだが」と思わぬ者はいなかったくらいでした。

### 楠木正成の智謀

それで、陸続と押し寄せて来た賊兵共は、ここまで来ると均しく馬から飛び下り、濠に飛び入り、櫓  
の下に立ち並んで、われ先に打ち入ろうと争った。正成はもとより智謀に長けた人ですから、上手な  
射手を200人ほどを城中に残して守り、弟の正季らに300余騎を副えて遥かの山に隠して置いた。寄せ  
手はそんな事とも知らず、ただひと揉みに揉み落そうと、同時に4方の切岸の下に着いたところを、城の  
中から指しつめ引きつめ、鎌を揃えて射たので、忽ち1,000余人の死傷者が出来た。賊兵共は当てが  
はず外れて、「いやいや、この城の様子は1日や2日では落ちそうにない。暫く陣を張って、手分けして合  
戦をしよう」と、攻め口を少し退き、馬の鞍を下ろし鎧を脱いで、幕の中に入って休んでいた。

## 第9話 正中の変と元弘の変

まさすえ はる じぶん て ととき  
正季らは遥かの山の上から見下ろして、「時分はよし」と300余騎を2手に分けて、両方から関をつ  
てきじん なか か い よ て あき じん  
くって敵陣の中に駆け入り、東西南北に破って通り、四方八面を切ってまわったので、寄せ手は呆れて、陣  
た か さわ き ど き  
を立て兼ねて、ただうろたえて騒いでいると、城中からも3つの木戸を同時にさっと開いて、200騎が切っ  
さき なら ぞくへい おどろ さわ ある つな あふ  
先を並べて打って出た。賊兵どもはいよいよ驚き騒いで、或いは繋いだ馬にのって溢れる者もあれば、  
つる ゆみ や つが い よろい  
弦をはずした弓に矢を番えて射ようとする者もあり、鎧1つに2~3人も取りついて、われのだ人のだと  
い あ しゅじん う くも ち ごと  
言い合っている間に、主人が撃たれても家来は知らず、親が撃たれても子は知らず、蜘蛛の子を散らすが如  
く、約5kmばかりも引退いた。

### 二重の塀

さすがの関東勢も、初めての合戦に思いの外の敗北をして、まさしげ ぶりよく あなど がた  
その翌日は、再び城の近くまでは押し寄せたが、すぐには攻めかかろうとはしなかった。けれども、見  
れば見るほど小さな城で、濠一重に塀一重というのですから、昨日のように、よそから飛び出して来る敵  
おにがみ こも なにほど ま  
さえ無ければ、たとえば鬼神が籠っていようと、何程のことがあろう、と言い出す者があつたので、先  
づ100,000余騎を分けて後ろの山を警戒させて、残る200,000騎で十重二十重に城を巻いて攻めかけた。  
ところが、今日は切岸の下まで着いて、逆茂木を引きのけて打って入ろうとしても、城中には人がいない  
の、音もせず、矢の一筋をも射ださなかった。

よ て づ の へい のぼ こ まさしげ  
寄せ手はいよいよ凶に乗って、四方の塀に手をかけ、同時に昇り越えようとする所を、これもまた正成  
けいりやく む  
の計略で、塀を二重に塗って、外の塀を切って落とすようにこしらえてあつたので、城の中から、4方  
つりなわ  
の塀の釣縄を一度に切って落としたので、塀に取りついた1,000余人の賊兵は、一時にどっと押し落とさ  
れて、起きることも出来ずに目ばかり光らしていた。城兵はそれを目がけて大きな石や木をさんざんに投  
げかけたので、寄せて いくさ う  
寄せたので、寄手は此の日の軍にも700余人を討たれました。

### 沸きかえる熱湯

この2度の合戦に賊兵どもは全く懲りて、今は城をせめようとする者は一人もいなかった。ただ  
かつせん まった こ  
その近辺にめいめいの陣を取って遠攻めにしていたが、4~5日も経って見ると、300,000の大軍を以って、  
わづ こ ひらじろ せ か な とおま  
僅かに4~500人の立て籠もった平城を攻め兼ね、ぼんやりと為すこともなく遠巻きにしている事が、いか  
あさま ふ が い  
にも浅猿しく、腑甲斐なくさえ思われ出して来た。それで、今度こそは攻め落とそうと、一層用意に用  
かさ へい きわ お よ つ べい あや す  
意を重ねて、塀の際まで押し寄せたが、これもまた釣り塀かもしれないと危ぶんで、直ぐには塀に取り付  
ほり くまで へい ひ たお こ すで ひ やぶ  
かず、濠の中から熊手をかけて塀を引き倒そうとした。えいえいと力を籠めて、既に引き破られそうに  
え ひしゃく ねつとう わ く はげ  
見えた所に、城の中から柄の3~6mのほどの長さの柄杓に熱湯の沸きかえっているのを酌んで、烈しくか  
あつ か くまで なに す たいきやく てあし や ごとい そん  
けた。この熱さに賊兵共はこらえ兼ねて、熊手も何も棄てて退却したが、手足を焼かれたり、五体を損  
や ふ たちま およ  
じたりして病み臥した者が、忽ち2~300人にも及んだというのであります。

こ ひょうろう ぜ いくさ じんじん  
今は賊軍はいよいよ懲りた。此の上は兵糧攻めにする外には道がないと、一向に軍をやめて、陣々  
やぐら さかもぎ とおぜ  
に櫓をかき、逆茂木を引いて遠攻めにした。



## 第9話 正中の変と元弘の変

### ひょうろうぜめ 兵糧攻め

これには城中の兵も困った。もともとの赤坂の城は俄か造りで、十分の兵糧の用意がなかったの  
で、合戦が始まって、城を囲まれてから僅かに20日余りだが、既に兵糧は残り少なくなって今4~5日  
の食料しかない。そこで楠木正成は城兵を集めて、「この間からの合戦に、わが軍はしばしば勝利を得た  
が、敵は大勢のことであるから平気である。

城中には既に食糧がとぼしく援兵もない。されば暫くこの城を落ちて、正成は自害したように敵に  
見せようと思う。そのわけは、正成が自害したと見れば、敵は喜び東国に引き返すであろう。引き返  
したら打って出て、その攻め上って来たら、深山に引き入れて、4、5度の程も東国勢を悩ましたら、つい  
には敵を亡ぼす事も出来るであろう。皆はどう思う」というと、一同もこれに賛成したので、それでは  
とて城中に大きな穴を6mばかり掘って、その中に、この間の合戦で濠の中に多く討たれて伏した死人を  
2~30ほど運び入れさせ、其の上に炭や薪を積んで雨風の夜を待っていた。

運よく、ある夜、俄かに暴風雨が起こった。風は砂を飛ばし、雨は篠衝くようで、真っ暗な物凄い  
夜でしたので、寄せての陣営はみな帷幕を垂れた。正成は城中に人を1人だけを残し留め、「われらが落  
ち延びて5~600mにもなったろうと思われた時に、城に火を懸けよ」と言い置いて、皆鎧を脱ぎ、5人  
3人別々になって、寄せ手の陣営の前をしづしづと落ちて行った。

### あかさからくじょう 赤坂の落城

やがて2km余りも落ち延びて、跡を振り返ってみると、約束通りに城は盛んに燃えている。寄せ  
手の軍勢は火を見て驚いて、それ、城は落ちたぞ、と勝鬨をつくって騒いでいたが、焼け鎮まった後に  
城中を見ると、大きな穴の中に、炭を積んで焼け死んだ死骸が多い。みなこれを見て、可哀そうに、  
とうとう正成は自害をした。敵ながらもあっぱれな死に方をしたものだといつて誉めた。時に元弘元  
年10月21日、笠置の陥った翌月であります。

また、遙かに備後(広島県東部)の国で義兵を挙げた桜山慈俊は、一旦可なりの勢いともなった  
のですが、笠置は陥り、楠木正成は自害したという風説が伝わると、付き従った者共は皆逃げ落ちてし  
まったので、失望して、一族若党23人と共に、その国の一の宮の社に籠って火をかけて焼け死んだ。  
また、備前(岡山県)の児島高德は兵を取めて行方を晦ました。

### おきごせんこう 隠岐に御遷幸

こうして全国は再び鎮まった。天皇の御企ては幕府の武力で全く押し潰されてしまったのです。  
その上、天皇を始め、第一の宮尊良親王も、妙法院宮尊澄法親王も既に六波羅の手に落ちられたのみ  
ならず、謀に与った公卿や僧侶も、殆ど悉くその手に捕らわれてしまったので、幕府はいよいよ  
よ戦後の後始末にとりかかった。それには第一に承久の先例が考えられて、先づ天皇——幕府から  
いうと先帝——及び二親王を遠国にお遷し申そうという事になったが、しかし、これは中々の大問題で  
すから、容易には決しなかった。現に幕府の家来の中にも、それが臣下の道ではないという事をいって、

## 第9話 正中の変と元弘の変

たかと き いさ  
高時を諫めた者もあったと伝えられるくらいでした。 しかし、<sup>ついで</sup>終に元弘元年12月27日になって、いよこれを<sup>おき</sup>決して、<sup>たかなが</sup>天皇を<sup>とさ</sup>隠岐に、<sup>そんちょうほう</sup>尊良親王を<sup>さぬき</sup>土佐（高知県）に、<sup>なが</sup>尊澄法親王を<sup>な</sup>讃岐（香川県）に流し奉<sup>たてまつ</sup>ることになりました。

### ごせんこう みちすじ 御遷幸の御道筋

あ  
明けて元弘2年3月7日、  
ごだいご  
後醍醐天皇は去年の10月から  
お住まいになっていた六波羅の  
やしき い いちじょうゆき  
北條の邸を出でられ、一條行  
ふさ ろくじょうただあき わづ  
房、六条忠顕らの僅か数人のお供で、幕府方の武士数百騎に  
ごえい せんこう みち  
護衛されて隠岐に御遷幸の途  
つ  
に就かれた。

きょうちゆう きせんだんじょ こうじ  
京中の貴賤男女は、小路  
に立ち並んで、泣き悲しんでお  
みおく  
見送りもうしあげた。 御道筋  
せつつ はりま みまさか  
は摂津から播磨を過ぎ、美作（岡  
ほうき  
山県北部）から伯耆（鳥取県西  
部）を経て出雲（島根県東部）  
へ いづも  
に出られ、それよりお船で北海  
ほっかい  
の荒海を隠岐へと渡られるの  
であつた。

### こじまたかのり 児島高德

この時、<sup>こじまたかのり</sup>備前の<sup>みまさか</sup>児島<sup>いんのしょう</sup>高德<sup>あんざいしょ</sup>が、<sup>けづ</sup>美作の<sup>し</sup>院<sup>く</sup>庄<sup>く</sup>の行在所のお庭の桜の木を削って、詩の句を書いて、  
ひそ  
密かに<sup>ちゅうぎ</sup>後醍醐天皇に忠義の心をお知らせした有名な話があります。  
たかのり  
高德は前にもいったように、一旦<sup>いっただんぎへい</sup>義兵を挙げたが、間もなく<sup>あ</sup>笠置も<sup>おちい</sup>赤坂も<sup>ひそ</sup>陥<sup>み</sup>つたと聞いて、密かに身  
かく じき  
を隠して時機の来るのを待っていました。ところが、<sup>せんこう</sup>今天皇が<sup>すなわ</sup>隠岐に御遷幸される事を聞くと、<sup>ふた</sup>即ち二  
ごころ  
心のない一族の者を集めて、  
ちゅうぎ いのち す しんみん  
「忠義のために生命を捨てるのは臣民の道である。今、<sup>しゅじょう</sup>主上は<sup>ぎやくしん</sup>逆臣に<sup>うつ</sup>隠岐に遷され給うと聞く。これより<sup>せんこう</sup>御遷幸の途中に<sup>とちゅう</sup>参り、<sup>まい</sup>君を奪い取り<sup>きみ</sup>奉<sup>うば</sup>って、<sup>と</sup>義兵を<sup>たてまつ</sup>挙げようではないか。若し<sup>ぎへい</sup>失敗して、<sup>あ</sup>屍<sup>も</sup>を<sup>しつぱい</sup>戦場<sup>かばね</sup>に曝すとも、<sup>せんじょう</sup>男子<sup>さら</sup>としての<sup>だんし</sup>本望<sup>ほんもう</sup>だ」

という、もとより心ある一族共は皆その議に賛成したので、ならば<sup>ぎ</sup>路<sup>さんせい</sup>の<sup>みち</sup>険阻な<sup>けんそ</sup>所<sup>ところ</sup>に待伏せする事にしよう、<sup>はりま</sup>備前（岡山県）と<sup>さかい</sup>播磨（兵庫県）の<sup>ふなさかさん</sup>境<sup>い</sup>の<sup>い</sup>船坂山の<sup>い</sup>嶺<sup>か</sup>きに隠れ伏して、<sup>かく</sup>今か今かと<sup>ふ</sup>待っていた。



いんのしょう さくら し だい こじまたかのり  
岡山院庄 桜の木に詩を題する児島高德



## 第9話 正中の変と元弘の変

きには<sup>よしとき</sup>義時、今は<sup>たかとき</sup>高時と、いくら憎んでも足りない<sup>にく た</sup>逆臣を北條氏は二人も出しているのです。

### 朝臣の断罪と流罪

幕府は続いてその4月8日に、<sup>はかりごと あづか</sup>謀に与った人々に対する<sup>しよぶん けつ</sup>処分を決して、或いは<sup>ある だんざい</sup>断罪に<sup>しよ</sup>処し、或いは<sup>るざい</sup>流罪に<sup>しよ</sup>処した。中でも<sup>しゅぼうしや</sup>首謀者と見られた<sup>ひの すけとも</sup>中納言日野資朝は七年前の正中の変の時に佐渡に流されていたのですが、今度、その地<sup>き</sup>で<sup>う ちゅうべん ひ の としもと</sup>斬られ、右中<sup>くづはらおか</sup>辨日野俊基は相模の鎌倉の葛原岡で<sup>さんぎ</sup>斬られた。また、<sup>からすまるなりすけ</sup>参議烏丸成輔は相模の<sup>はやかわじり</sup>早川尻で<sup>きたばたけともゆき</sup>斬られ、中納言北<sup>かしはばら</sup>畠具行は鎌倉へ送られる途中、近江の柏原で<sup>るざい</sup>斬られた。流罪になった者は一層<sup>いっそう</sup>多く、大納言<sup>ふじわらもろかた</sup>藤原師賢は下総<sup>しもふさ</sup>(千葉県北部)へ<sup>なが</sup>流され、<sup>まてのこうじふちふさ</sup>萬里小路<sup>ひたち</sup>藤房は常陸(茨城県)へ、弟の<sup>しもつけ</sup>季房は下野(栃木県)へ<sup>えんかん もんかん</sup>流された。また、坊さんの<sup>えんかん</sup>円観や<sup>もんかん</sup>文観もその他の坊さんらと共に、それぞれ遠くの国や島に<sup>げんこう へん</sup>流された。世にこれを元弘の変と<sup>へん</sup>いいます。元弘元年から2年にわたっての出来事だったからです。

かの有名な<sup>ひのの くまわかまる</sup>日野阿新丸が、<sup>わづ</sup>僅かに13才という少年の身で、はるばると京都から佐渡の島まで行って、父<sup>すけとも</sup>日野資朝に<sup>あ</sup>逢わせても<sup>すけとも</sup>くれずに、<sup>ほんま さぶろう う</sup>資朝を殺してしまった<sup>あだ むく</sup>本間三郎を討って<sup>あわ</sup>仇を報いたという、<sup>けな</sup>哀れにも<sup>あわ</sup>健げな話はこの時の事であります。

( 第9話 正中の変と元弘の変 終わり。 次は前頁に戻り、 第10話 護良親王と楠木正成 へ )